特250
661

作文新編備考

五　卷

0049435000

0049435-000

特250－661

作文新編備考

光風館編輯所・編

光風館書店

巻5

昭和3

AHJ

特250
661

作文新編備考

五卷

東京
光風館發行

特250
661

作文新編備考

光風館編輯所編

卷五

東京 光風館藏版

昭和四年 一月 光風館

作文新編備考　卷五

目次

一　創作と鑑賞（その一）……一
二　創作と鑑賞（その二）……六
三　構想と推敲まで　……一〇
四　文章の優劣（批評と其の標準）……一六
五　文章の種類　……二三
六　記述と說話　……二五
七　說明と議論　……二八
八　儀式文（祝賀文）……三三

九　儀式文（弔祭文）……三六
一〇　通信文……三九

目次終

一　創作と鑑賞（その一）

要旨

人間に賦與されて居る創作力の尊ぶべき事を述べ、生徒の作文も創作でなければならぬと斷じ、更に創作の本義の闡明に努めました。而してよき創作の爲にはよき文章魂を養成せねばならぬ所以を說き、文章魂養成の爲には鑑賞が必要である旨を記したのであります。

卽ち作文の根本義を說きたいのが本課の主眼でありまして、十分生徒に作文の尊ぶべき所以を會得させ創作心の涌起を促進させたいものです。而して文章魂の養成を力說するに當つては、「文は人なり」といふ樣な考も敷衍叙說していたゞけば一層結構だらうと

九　儀式文（弔祭文）……三六
一〇　通信文……三九

目次終

作文新編備考　巻五

一　創作と鑑賞（その一）

要旨

人間に賦與されて居る創作力の尊ぶべき事を述べ、生徒の作文も創作でなければならぬと斷じ、更に創作の本義の闡明に努めました。而してよき創作の爲にはよき文章魂を養成せねばならぬ所以を說き、文章魂養成の爲には鑑賞が必要である旨を記したのであります。

卽ち作文の根本義を說きたいのが本課の主眼でありまして、十分生徒に作文の尊ぶべき所以を會得させ創作心の涌起を促進させたいものです。而して文章魂の養成を力說するに當つては、「文は人なり」といふ樣な考も敷衍叙說していたゞけば一層結構だらうと

思ひます。

參考

○香川景樹（一七四二八――一八五〇三）鳥取の人。有名な歌人。京師の歌人香川黃中の養子となつて歌學を教授した。門弟子、萬を以て數へられた。天保十二年、從五位下肥後守となり、同十四年卒した。年七十六。著書は「桂園一枝」「桂園遺文」「新學異見」「隨所師說」等數多ある。此處に引いた冒頭の句は「桂園遺文」に出てゐるものである。

○ホキツトマン Walt Whitman（一八一九――一八九二）亞米利加ニユーヨルク州のロング・アイランドに生れた詩人。二十歲の頃から寄稿家、雜誌記者、演說者としての生活をしたが、彼の名詩集「草の葉」の第一輯は一八五五年に發刊された。一般からは可なり嘲笑を浴びせられたが、エマーソンによつて激賞された。一八五六年には其の第二輯、一八六〇年には其の第三輯を出した。其の詩は從來の韻律を無視した自由詩で、民主々義への情緒的な信條をその內容として居る。詩風は一體に元氣に滿ち奔放雄渾である。此の課に引用した「創造の法則」の詩句は有島武郎譯のホキツトマン詩集（叢文閣發行）に據つたものである。猶邦譯詩集としては白鳥省吾氏の同書名のものが新潮社から出て居る。

○リツプス Theodor Lipps（一八五一――一九一四）獨逸の美學及倫理學者。其の著を祖述して阿部次郎氏は「美學」なる一書を岩波書店から刊行して居る。此處に引用したのは同書第五章第二節藝術（三三〇頁）にある一節である。リツプスの感情移入 Einfühlung の說は有名であるし且參考になるから、今阿部氏の「美學」（一五六、一五七頁）より其の一節を摘出して見よう。

我等は對象の生命とは自己の生命に外ならぬことを發見する。而も又この際に於ける自己の生命は嚴密に對象の特質によつて規定されてゐることを發見する。對象の生命は主觀と客觀との共同製作である。それは對象の觸發によつて對象に移入されたる自己の生命である。それは對象の特質に從つて或は强調され或は抑制され――かくて一種の變容（モディフィカチオン）を受けた自己の生命である。自己の生命を移入することによつて、對象は始めて我等にとつて生命あるものとなるのである。さうして生命は常に感情としてのみ我等の直接なる意識經驗となる。故に生命の移入とは換言すれば感情移入である。

○阿部次郎（明治一六――）山形縣生。東大哲學科出身。「美學」の外「人格主義」「倫理學の根本問題」「三太郎日記」等の著がある。東北帝大教授。

○「文體明辨」の中に李時勉の言葉として次の樣なのがある。

夫文章見レ重ニ於世ニ以テ其人ニ也。苟非ニ其人ニ雖ニ美而傳ニ反以爲レ病ト矣。

○宋の嚴羽の「滄浪詩話」にも次の樣な句がある。

夫學レ詩者、以レ識爲レ主、入レ門須レ正、立レ志須レ高。

○明徐禎卿の「談藝錄」にも、詩辭が人によつて異なる旨を次の樣に述べて居る。

宗工鉅匠辭淳氣平。豪賢硬俠辭雄氣武。遷臣藁子辭厲氣促。逸民遺老辭玄氣沈。賢良文學辭雅氣俊。輔臣弼士辭尊氣嚴。閨音壺女辭弱氣柔。媚夫倖士辭靡氣蕩。荒才嬌麗辭淫氣傷。

○顧涇陽曰、文章家有奇古、有雄傑、有雅逸、有清爽。種々不同。宜隨其性之所趨。而名造其極。云々（太田氏名文大觀三六七頁）

○フランスのブュッフォン Buffon（一七〇七——一七八八）の有名な警句に「文體は人なり」（Le style c'est l'homme）と云ふのがある。

○フランス現代の美學者ポオル・ゴオルチエ氏（Paul Gaultier）は其の名著「藝術の意義」の中で次の樣に說いて居る。

藝術作品の獨自性、ユニークな印象、獨創力等は、その作家がこの作品の中に注ぎ込む所のもの——彼の夢、彼の悲しみ、彼の野心、彼の希望等、すべて彼の胸に生き且つ彼の胸の琴線に觸れたものを、その作品の中に注ぎ込んだところから生れて來る。眞の藝術品である限り、その線、調子に於て作家その人の心の世界を表明しないものは決してない。畫家、音樂家は要するにその製作品の中で、彼等自身を歌ひ又畫くものである。（本間久雄氏譯）

○ヴィクトリア（一八三一——一九〇一）朝の文學批評家ペイタアは次の樣に言つて居る。（土居光知氏譯）

著者の目的が意識的に、或は無意識的に、現實の世界或は事實の模寫でなく、其の意義の表現となるに比例して彼は藝術家となり、其の作品は藝術となる。

眞——それなくては何等の價値も技巧もあり得ない。そして要するに凡ての美は眞に精妙なるもの、換言すれば內なる直視に對して言語の微妙なる適應としての表現である。

○露西亞の未來派畫家ワシリー・カンヂンスキ Wassily Kanainsky（一八六六——）が藝術家と藝術品は不可思議な、謎のやうな、神秘的な方法で藝術家から生じて來る。藝術品は彼より發して以て獨立の生命を有し、人格を有するもの、獨立せる、精神の通つて居る主體となり、また具體的な眞實な生活を營む、卽ち本質なのである。（小原國芳氏譯）

○劇作家にて早稻田大學講師たる山本有三氏は感想文「途上」中で次の樣に言つて居る。

およそ藝術上の創作は、必ず一回限のものであつて、繰返さるべきものではない。繰返されるやう

なら、もう創作とはいはれない筈である。

○賴山陽曰く、文は氣を以て主となす。その人となり、氣あれば、文甚だ工ならずとも誦すべし。苟くも氣なくば、工なりとも觀るに足らず。相如、楊雄の如き是れのみ。昌黎の貴ぶべきは氣にあり。文の工はこれに次ぐ。（太田氏「名文大觀」五五頁）

二　創作と鑑賞（その二）

要旨

鑑賞とは何であるか、「鑑」とはみる事、認める事、正しく理解し明らかに認識する事であるとしてみる意義を說き、單に肉眼を以てみるのでなく心眼でみねばならない。進んで「賞」の意味する批評の働きまで至り讀む文章の內容を自己の問題として考へねばならぬ事を述べ、更に遊神同化の作用まで至らねばならぬ事を記しました。

鑑賞は丁度眞宗の往相廻向に相當し、他の文章から會得する處あれば其處に自ら心ふくるゝものあり、これを生み出さうと云ふ事となり、還相廻向に相當する創作の働きを呼びおこす事となるのであります。また創作をして行けば體驗の中に鑑賞眼も深まる譯で、この兩者を循環的に繰返してゆく處に立派な文章魂が養はれる事になります。それで平生さういふ方法であらゆる場合に、文章創作の根元となるよき文章魂を養つて置かねばならぬと、生徒が平素心掛くべき事を指示したのであります。

參考

○土居光知　東北帝大にあつて文學を講ずる人。其の著「文學序說」は名著としての評が高い。引用句は全書「藝術的形象」中「見ることの意味とその擴張」の條（一八頁）にある。

○雨森芳洲（二三二八——二四一五）木下順庵に學び、對馬侯の儒臣となる。寶曆五年歿、年八十八。

○往相廻向と還相廻向に就いては、東京帝大で文學を講じて居た松浦一氏の著「文學の本質」中第四講文學の涅槃の條（二七八頁）に詳細が說かれて居ります。其の中の一節に次の樣な味ひ深い事が書いてあります。

一休和尙の末期の句といふもの、中に、

朦々而三十年。淡々而三十年。朦々淡々六十年。朦（ヒッテ）レ糞捧（フグ）ニ梵天（ニ）。といふのがあるといふ。一休は木乃伊となつて乾枯らび、露を吸つて昇天する仙人ではないのである。朦々淡々六十年、糞を朦つて往生する人間である。而して之を梵天に捧ぐる處に、我々の涅槃の妙味がある。涅槃は元平等界のものであります、情意の動く處は差別界であります。已に還相廻向といふ時に此の二界の結合を見、朦糞捧梵天といふ時に亦此の二界一致を見る。此の二界の一致は、哲學上の諸問題の歸結となるのみでなく、文學の本質に關する諸問題の最後の斷案を與ふるものと思はれるのであります。

○源信僧都　高僧。俗姓占部氏。大和國葛城郡の人。正親の子。叡山に登り、慈慧大師に事へて顯密の教を究め横川に居り、佛書を著し佛畫佛像をよくし又歌に通じて居た。寛仁元年歿。年七十六。

○早稲田大學教授吉江喬松氏は「愛と藝術」中に於て次の樣に言つて居る。

諸君は偉大な藝術に接した心持、或は尊敬すべき人格に接した心持をば、直接經驗せられたことがあらう。その時の感じは如何であつたらうか。恐らく、我が眼が開け、我が天地が廣くなり、そして我が生命が豊かになつた感じでなかつたらうか。若し人が、自分は今までに偉大な藝術に接した經驗なく、敬愛すべき人格に接した心持を味つたことがないと、眞に斷言するならば、その人は不幸な人である。その人は今だに自分の生命の目醒を味はなかつた人であるからである。

○阿部次郎氏の著「人格主義」中の言葉。

書を讀むとは心を讀むのである。自己の心を讀むことを知らないものが、どうして他人の心を讀むことが出來よう。

○本居宣長の「物のあはれ」を說いて居る條の次の言葉は鑑賞眼の有無といつた樣な事の思ひ合はされるものである。

必ず感ずべきことにふれても、心うごかず、感ずることなきを、物のあはれ知らずと云ひ、心なき人といふなり。もの、わきまへ心ある人は、感ずべき事にはおのづから感ぜではえあらぬわざなるに、さもあらぬは何とも思ひつくかたなくて、かならず感ずべき心を知らねばぞかし。

○早大講師本間久雄氏は其の著「文學概論」の第四篇文學批評論に於てペイタアの鑑賞に就いての見解を次の樣に述べて居る。

刻々の經驗そのものを目的とするといふ彼の人生觀上の態度を對藝術の態度に推し移せば、作品から受ける刻々の印象の尊重、ペイタア自身の言葉でいへば刻々の快感の尊重といふことになる。この意を別な言葉でいへば何等の原因に囚はれず、何等の學說に囚はれず、出來るだけ「美の對象に遭遇して深く感動する能力」の一種の氣質を把持することが藝術鑑賞家の第一要件といふことになる。この意を更に敷衍すれば出來るだけ多く、與へられた作品を妥當に、善良に鑑賞しようとする

意志乃至態度を把持するといふ事になるのである。

○紀平正美博士は「行の哲學」に於て次の樣に多讀の妙味を說いて居る。

江園春風吹不起　鷓鴣啼在深花裏
三級浪高魚化龍　痴人猶屬夜塘水

之は「碧巖集」第七則にある頌であるが、其の他「唐詩選」中の詩でも何でも良いから、試みに執つて誦して見るが良い。最初一讀再讀の處では、全體の精神は、或は分らないかも知れぬ。でも反復幾度となく誦したならば、きつとその內に、自ら何ものか現はれ來るであらう。そして幾分その意義が了解せられるやうな感を生ずるであらう。同時に現在の苦悶懊惱すら脫却するの感を抱くであらう。是が藝術的方法の第一義である。その眞諦である。

三　構想から推敲まで

要旨

文章魂を養ふ事は作文に於ける第一義であるが、第二には文章魂から生れ出るものを如何に表現するか、その方法を得ると否とは、成果の良否に至大の關係があります。で本課はさういふ技巧方面の注意に說き進んで來たのでありまして、先づ文章の設計といふべき構想に就いて秩序、聯絡、統一の肝要な事を述べました。構想成就して實際の創作に當つてはどうか。其處には一種の創作三昧境があらねばなりません。さて愈〻文章が一通り出來上つてもそれをそのまゝ放棄して置く樣では磨きをかけぬと同然であります。生徒には特に此の點が忽せにされ易い事でありますから、其處には推敲の缺くべからざる所以をよく飲みこませて、作文の時間に十分その功を積ませていたゞき度いものと存じます。

參考

○冒頭の景樹の言葉は「桂園遺文」より、後方「明は向ふより云ゝ」の句は「隨所師說」より引用。

○土居光知氏の引用句「形象を以て云ゝ」は「文學序說」四頁より。

○芥川龍之介（明治二五——昭和二）東京生。東大英文科卒。小說集隨筆集等多く刊行されたが全集が纏まつて出てゐる。自殺。

構想から推敲まで　一一

○馬琴（二四二七——二五〇八）明和四年江戸深川生。近世小說の大家。文辭絢爛、引證精博、作物に勸善懲惡の意を寓した。晩年明を失ひ、嘉永元年歿した。年八十二。南總里見八犬傳、椿說弓張月等の作最も名がある。

○泉州堺一國寺云々の物語は生徒のよく知つて居る處である。あの話は柳澤淇園（寶曆八年五十三才歿）の「雲萍雜誌」に出てゐる。

○頼山陽推敲の事に就いて評論家朝比奈知泉（文久三年生）の山陽を論ずる一節に次の樣な事がある。

余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その「常曰『謂二我才子一未レ悉レ我者也、謂二我能刻苦一者、眞知レ我矣。』」といふに至り、竊かにその實を失へるに非ざるかを訝りしが、後かの前兵兒諮並に蒙古來の原稿を觀るに及び、その苦心經營一句も苟もせざりし實迹を審かにし、且つその古賀穀堂を訪ひ、初、その千言立ちどころに成る敏才に驚きしが、數月を隔て、再び訪ひし時、その文稿の依然として改刪する所なかりしを見て、玆に與し易しとの念を起したりといふ逸事を聞き、その意匠慘憺、勉勵刻苦の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐に景慕の情を催したり。蓋し創意の才は必ず刻苦の力と相待ちて後始めて絢爛の華彩を發すべし。

因みに江木鰐水は安藝の人で山陽の門人、古賀穀堂は佐賀藩の儒者である。

○レフ・トルストイ（一八二八——一九〇九）露西亞の文豪。トウラ縣ヤースナヤ・ポリヤーナの貴族の家に生れた。初め法律を學び軍隊生活をしたが、後、生地に於て農民の教育に從ふと共に幾多の宗教哲學文學上の著作に耽つた。晩年はコセルミイ修道院に逃れ、更に他へ走らうとする途中オスタポーウの小驛で喀血して遂に逝つた。小說「復活」「アンナ・カレニーナ」「戰爭と平和」、戲曲「闇の力」等有名。我が國白樺派の人々はその影響を多大に蒙つてゐる。

○廣瀨淡窓（二四四二——二五一五）豐後の人。著名の詩人。安政二年歿。年七十四。

○皆川淇園の文より構想の參考ともなる文を拔く。「彼の名手答へて、其の人の碁立は、最初の一石を打はじめたるより、終りまで、唯々一筋の思ひよりを立て打給ひて、中頃より物好のかはることなし。是れ上手になるべきよき筋の碁なりといひたりき。文章の稽古も、たゞ一道のことを以て筋を立てゝ行くことを心掛けて習はざれば、上達しがたきこと、碁と同じきことなり。」（太田氏「名文大鑑」三三〇頁）

○文章組織の形式から文章學者は色々獨得の分類を與へて居るが、五十嵐力氏は次の五種に分けて居る。

一、追步式——事物の端より端に一步〳〵叙述を進めてゆく方式。

二、散敍式——事物を散り〴〵に列叙したゞけで、其の間に關係もつけず又統べ括りもせぬもの。

但し散列した間に隱れた一脈の筋があつて朧ろに全體の趣味を繋ぐもの。

三、頭括式――文の劈頭に全體を括るべき大綱を掲げて、次に大綱の中に含まれる事物を擧げるもの。但し事實例證を擧げるだけで文尾で括りをつけぬ方式。

四、後括式――初めに幾多の事物を列擧し、結尾に至つて之を統べ括る方式。

五、雙括式――前に綱領を掲け、之を繫說して後、結尾に再び之を統括する樣式である。

かゝる文章組織の形式は大體の型で目立つたものを擧げたるに過ぎないので、實際の構想上に當つて必ずこの何れかにきちんとあてはまる譯にゆかぬ事も多からう。たゞ標準的な型としてこれらを附說されるかどうかと云ふことは教授者の按配に俟ちたい。

○佛蘭西の大彫刻家ロダン Rodin（一八四〇――）ミロの彫刻エヌスに就いての言葉。

偉大な藝術家は自然が構造するやうにやつて、解剖學が記述するやうにはやらない。彼等は或る筋肉、或る腱、或る骨を其のもの、爲には彫刻しない。彼等が狙ひ又彼等が表現するのは全體である。彼等の製作が光の中で顫へたり陰の中へ浸るのは、大きい面によつてである。

形の中心は此の脈うつ肉體の奥深い生命の中で息づく。其の高大の骨の結構を見ると、其の思想を見るやうだ。隱れ又現はれて、實に岩疊に組織されたすべての此の優美！　眼は暗黑にも耽光にも觸れず、しかも生命が、生きた水のやうに透明して、動搖も驚跳も無く流れてゐる此の靈のやうに甘美な形の背後に、しつかりした力づよい骨組の抵抗が實によく感じられる！　弱む事の無い此等の基礎によつて支へられ、此の堅實性で保證されて、肉に喜び勇んで躍る。（高村光太郎氏譯）

○成島柳北の推敲に就いての言葉。

今の少年詩客は往々他人の評語のみを乞ふを樂んで、刪正を受くるを喜ばず。是れ大なる心得違ひなり。大家と雖も互に改竄を乞うて、白璧の微瑕なからんを要すべし。況んや後進をや。（太田氏「名文大觀」三四〇頁）

○雨森芳洲が「竇藏主に贈る」文で三多の說明をして居る。三多は歐陽修の語に基く。

詩者做多、看多、商量多と申候。兎角多く御作被ㇾ成、上手にお成り可被成候。商量の字、先は人と相談する事を申候へ共、人と相談いたす計りにては無ㇾ之、以ㇾ心問ㇾ心、我心にて思案する事をも商量と申候云々。（同前四一六頁）

○皆川淇園曰く「何事にても骨を折らぬは下工なるべし。」（同前二五七頁）

○「女の一生」「美貌の友」等の傑作も一朝一夕に出來たものではない、モオパッサンは習作を書いては師のフロオベルに見て貰つてゐた。フロオベルはそれを見て、無用な形容詞を削つたり、文章の調子を整へたり、深切な批評を添へてやつたりしてゐた。そして二つの文句が同じ技巧であつたり、同じ調子であつたりする時は何時も嚴しく誡めてゐた。或る時、モオパッサンの母ロオラがフロオベル

に向つて、

「もうギィに役所を止めさせて、文學を專門にやらせてはいけないでせうか。」と訊ねた事があつた。

「まだいけません。落第生にしてはなりませんからね。」

とフロオベルは言つた。モオパッサンの成功は實にこの間の殆ど十年間の賜物であつたのだ。（「中央文學」佛蘭西文藝號）

○芥川龍之介の「藝術其の他」なる小論の一節。

昔セザンヌはドラクロアが好い加減な所に花を描いたといふ批評を聞いて、むきになつて反對したことがある。セザンヌは唯、ドラクロアを語るつもりだつたかも知れぬ。が、その反對の中にはセザンヌ自身の面目が、明々白地に顯はれてゐる。藝術的感激を齎すべき或る必然の法則を捉へる爲なら、白汗百回するのも辭せなかつた、あの恐るべきセザンヌが。

四　文章の優劣（批評と其の標準）

要旨

前課で述べた推敲も如何なる點が文章の優れてゐる點であるか、又缺けて居る點であるかと云ふ事が判斷つかないでは行はれない事であります。それで此の課では我々の求める文章はどういふ點に於て配慮されたものでなければならぬかといふ事を考察致しました。先づ第一に大局に於て支離滅裂でない統一ある文でなければならない事、第二に各語句が紛はしくなく又分り易く精確明瞭でなければならない事、第三に各語句が粗笨生硬でなくよくあてはまつた純粹穩當でなければならない事などが、その文章批評の標準となります。

但しいくら大局の組立がよく、局部々々の各語句をとりはなしてみてそれが整つたものであつても、つまり理論上からだけ言へばさして非の打ち處のないものであつても、これを一個の生命ある文章として觀察する時、案外感銘のない事もあります。即ちいくら義理が整つて居ても調の整はぬ事があります。それで最後に景樹の句をあげて、義理の整つた上に有機的な生命がなければならぬ、それには豐富な文章魂の發動が必要であるといふ事を附說したのであります。併し此の處いさゝか書き足らぬ憾みもありますの

で、然るべく敷衍説明して戴きたく思ひます。

參考

○カアライル　Carlile Richard.（一七九〇――一八四三）英吉利の自由思想家。

○景樹の「平語ぞ規矩云々」の句は「桂園遺文」より、最後の「調は義理を云々」は「隨所師説」よりの引用。

○柳亭種彦（二四四三――二五〇二）江戸の小説家。通稱高島彦四郎。天保十三年歿。年六十。その著「田舍源氏」は當時に喧傳された。

○芭蕉（正保元――元祿七）姓は松尾、又桃青と號す。伊賀に生る。俳諧に正風を興し、舊來の俳風を一變した事は有名である。著書「奥の細道」「猿蓑」「炭俵」「續猿蓑」其の他。

○佐々醒雪は其の「修辭法」で、大橋乙羽の「歐米見聞錄」中の文に就いて、其の不統一を次の如く指摘したり又改竄したりして居る。

「話し了りて亭を去り、森林の間を歩して隣村に佛の英傑ガンベッタの故家を訪はんとす。公園を出づれば、門壁あり。一村自治制を布きて、輸入の酒と煙草とに課稅せり。」

右の中「公園を出づれば」以下の句は全く別種の思想なり。畫同一節に置くべきものならんや。」

「われ等今日しもその故家を訪ふ。愉快知るべきなり。薄暮、夕日の紅く杜に沈むを眺め、林泉樹影を蔭するを賞して、且つ語り、且つ歩して、停車場に至りぬ。七時巴里に歸り、食後合田君と珈琲アメリカンを見る。建築の美羨むべし。」

右の中前節は、薄暮といふ字の前後を、二節に分たざるべからず。後節の巴里に歸りしこと、珈琲アメリカンを見しこととは、亦、全然別事なれば、二節に分つを要す。今試みに改竄せば、略、左の如くなるべし。

「われ等、今日しも其の故家を訪ふ。愉快知るべきなり。薄暮、夕日……停車場に至り、巴里に歸りしは七時なりき。食後……羨むべし。」

○早大教授五十嵐力氏は、其の著「修辭學大要」に於て不統一な文例の批評を試みてゐる。今その二、三を擧げてみよう。先づ「徒然草」の一節である。

「家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假りの宿りとは思へど興あるものなれ。」

右の中點を打つた六字は無駄で「つきづきしきこそ」とあるべきであらう。家の相應なるこそ興あれ。」といへば聞えるが、「相應にありたい事こそ興あれ」では埒があくまい。察するに兼好法師消し損ねか、後人の寫し誤りかであらう。

次に「新約書」の一節、

「天國は朝早く出で、葡萄園に工人を雇ふ主人の如し。」

の如きも「天國は主人の如し」では可笑しい。

猶主格の不統一なるものとして次の樣なのを擧げてゐる。

「吾れ衣食の爲めにせず、溫袍の爲めならず。」

○右に於て、「吾れ」は「爲めにせず」の主格にはなれるが、「爲めならず」の主格になることは出來ぬ。「吾れ溫袍の爲めならず。」では文を成さぬからである。「爲めならず」を活かすならば、「吾の學ぶは」といふやうな、別の主格を要するであらう。卽ち、此の文には二つの主格が混入して「吾れ」といふ語は「爲めにせず」の一句を支配しては居るが、己が領內なる他の一句「爲めならず」を統御することが出來ぬので、その爲に文脈が亂れて解り惡くなつたのである。かやうな文は「吾れ衣食の爲めにせず、溫袍の爲にせず。」或は「吾れの學ぶは衣食のためならず、溫袍のためならず。」のいづれかに改むべきであらう。

○ロダンは平易な言葉を用ひる事に就いては次の樣に言つてゐる。

私は民衆の言葉を使ふ。街の人の言葉を使ふ。思想は明瞭であつて容易く呑みこまる可きものです から、私は大多數の人に會得して貰ひ度い。學者風の言葉や見慣れない文句は審美學專門の學者方に讓ります。（クラデル編「ロダンの手帳」高村光太郎氏譯）

○五十嵐力氏の「修辭學大要」により、純粹でない語の用例を擧げてみよう。

英語を知らぬ老幼或は無學の人の前で弔文を讀み、弔ひ演說などする場合に「彼の命は短かりき」というてよい所を「彼のライフは短かりき。」など言つたらどうか。「氷を嚙み砂糖を嘗める。」と普通に言つてよい場合に、故らに「アイスを嚙み、シユーガーを嘗める。」といつたらどうか。上野停車場といふべきを「上野の車坮」と言つたらどうか。午前九時半頃といふべきを「上午九點後約半餉」と云つたらどうか。

山陰道、山陽道を「そともの道」「かけともの道」と書いたらどうか、「幼し」といふ所を「きびは」と書いたらどうか、「悉く」を「ふづくに」と書いたらどうか。

伊達正宗が京都の公卿達の需めに應じて仙臺の方言で作つたといふ、「東から眞赤な月がづばぬけていづこの雲にのたし込むらむ。」の如き、滑稽な作としては面白いが、眞面目な普通文を此の通りやられては困るでせう。

「又穩當に就いて同書より一例をひいて置かう。

「岡西惟中といふ歌人が「神代よりのあはれを思ひつゞくるも。物の數ならぬ秋の夕暮。」といふ歌を咏んで、飛鳥井雅章に添削を乞うた所が、初めの一句を「四つの時の」と改められて大いに感じた

といふ話がある。秋のあはれは四季の景物の何れかに較べるのが穩當で、開闢以來の事柄に比ぶべきではないからであらう。

五　文章の種類

要旨

文章の種類は、標準の取り方によつて色々に分れるものでありますけれど、無暗に多くの分類を示しても、徒に煩雜を加へる許りでありますから、此處には是非心得て置いて貰ひたい分類だけを二通りあげました。即ち文體の上から文語體と口語體とに分け、更に前者を時文體、雅文體、漢文直譯體、洋文直譯體、候文體の五種、後者を常體、敬體の二種に分つものと、取材の上から記事文、叙事文、說明文、議論文の四種に分つものとの二通りであります。取材の上からの各種の文について、其の表現の心得等、後の課の方で詳述しますので、此處では專ら文體の上からの各種の文について說く事と致しました。

かういふ文章の種類等に就いては、なるべく多くの文例について判斷し習熟させる事が必要でありますから、作文以外の國語の時間等で、時につけ折にふれ指導する樣注意していたゞけたら實效が多からうと思ひます。

參考

○文の種類の分け方で、本課に分けた以外では、描寫の手段から寫生文、想像文の二種に分つもの、効用の上から美文、普通文、書翰文、儀式文、廣告文の五種に分つもの、表現の形式から韻文、散文の二種に分つもの等がある。

○叙事文は更に之を日記文、紀行文、傳記文、歷史文、小說文の五種に分つ事もある。

○雅文體の文例。

如何ならむ野の末なりとも、都のわづらはしきよりはと思ひたちて、過ぎし秋の暮より、われ居を湘南のほとりにさだめぬ。訪ひくる人もさすがに稀なれば、世を外なるすまひ、わびしくもまた長閑なりき。（高山樗牛）

○漢文直譯體の文例。

「道通天地有形外、思入浮雲變態中」に至つては、是れ實に天然と同化したるなり。然れども天然と親むは未だ幽寂の極にあらず。寧ろ如かむや、一室の裡、又玄、又默、意象極めて分明なるに。是時に於て意思收縮、凝りて氷の如し、烱星の如し。敬虔、警發、身は上帝の聖壇に近づきたるを覺ゆるのみ。（德富蘇峯）

○洋文直譯體の文例。

今の政治家の誰でもに向つて、廉潔公平なるべく忠告する必要あり。（五十嵐力氏「修辭學大要」）

○候文體の文例。（候を用ひてよき處にわざと用ひないで結んで居る處もあるが、文章の勢の上から許されていゝ場合のあるを注意したい。）

書翰文と普通文とは、其の體大に異なり居り候ふが、その主なる點は、書翰文は、一に候文とも言はるゝ程にて、候と云ふ字を多く用ひる事に候。もと「侍り」と云ひしを、鎌倉時代以後「候ふ」とかはり、今日の口語にては、「ます」といふ。例へば「待つ」の意をいふに「待ち侍り」「御待申上候」「お待ち申します」といふが如し。候は、口語の上には死したれど、文章の上には生命あり。今日、普通文に文章語を許す以上は、書翰に候を用ひても、毫も怪むべき事にはあらず候。

六　記述と說話

要旨

記事文の事とする記述は繪畫彫刻と同樣の任務を持ち、叙事文の事とする說話は繪畫彫刻の及ばない「動」を寫し出す任務を持つて居ります。

記述には科學的記述と美術的記述とがあり、美術的記述の本領を突詰めてゆく所に印象主義が發生します。美術的記述は寫實主義よりむしろ印象主義を尊ばねばなりません。又記述は記述だけで獨立するものでなく、說話と混用されて居る事が多うございます。說話に就いては活動的であり秩序の備はつて居る事が大事であります。

尙傳記文に就いての特別の注意を附加して置きましたのは、傳記風な文章は先にせねばならぬ場合が可成多いだらうと思惟したからであります。

參考

○アーサー・ジエローム・エッディ Arthur Jerome Eddy の「立體派・後期印象派」("Cubists Post-Impressionism.") なる書は、拾數年前シカゴで出版された書物で、此處に引用したのは Esoragoto なる章に出て居る。松浦一氏の著「文學の本質」(二一八頁)參照。

○大窪詩佛(二四二七——二四九七)字は天民、詩聖堂と號す。常陸の人。江戸に出で詩人として又書家畫家として名があつた。天保八年歿。年七十一。

○ラスキン John Ruskin (一八一九——一九〇〇)英吉利の有名な美術評論家。

○保元物語　後白河院御即位の事から始めて、崇德院御謀叛の事、白河殿夜討の事等、三十七條を三卷に分つて記したもの。小中村清矩氏は「盛衰記の文體に似てはあれど、何となくそれよりは古かるべき心地せらる。ある說に鎌倉の實朝將軍の頃のものにやといへるはさもあるべし。」と言つてゐる。作者、著作年代共に未詳。

○主觀にうらづけられ啓發的表現をとつて居る美術的記述の實例。

うらうらと長閑けき春の心より匂ひ出でたる山櫻花。　眞淵

路の邊の清水流るゝ柳影、しばしとてこそ立止まりつれ。　西行

おほかたの霞は立ちも及ばねど、春の光に匂ふ富士の根。　千蔭

○平家物語は說話の文であるが、其の中には記述の文が混入されてゐる。今一節をあげて記述の箇所に傍線を引いてみよう。

頃は睦月二十日餘りのことなれば比良の高根志賀の山、昔ながらの雪も消え、谷の氷打解けて、水は折節まさりたり。白浪夥しう漲り落ち、瀨枕大に瀧鳴りて、逆卷く水も早かりけり。云々

○次の文は學生の書いたものである。純粹に記述だけ又說話だけの文章は頗る稀である。混用して居る處は、どういふ部分が記述か、又說話か、分解理解させたいものである。

秋の夕暮

一團の猛火のやうな落日が、夕の空にむら〳〵と燃えて、そのあたりには夕燒雲が漂うてゐる。天上界には今大騷擾が起つてゐるやうだ。鴉が黑い點を散したやうに、紫紺色に染め出された遠い連山指して飛んで行く。

日は沈んだ。雲はまだ夕映の美しさを染め出してゐる。紅、黃、紫、橙などあらゆる色を交へて大空をいろどつた。この夕雲をふと林間の小徑から、鹿の角の叢立つたやうな梢の彼方に見つけた時など、思はず「あゝ」と感嘆の聲を揚げずには居られないであらう。

夕闇は忙しく駈廻る。冷々とした秋の氣が肌に沁みて、夕暮は淋しさが身に迫つて來る。黃金色の空氣

は蒼くなつた。一日の勞働を終へた人は、疲れた體を家路に運んで行く。電車や自動車のゆききする響、豆腐屋のラッパの音、人の走るやうに速く歩くさま、それからがいかにも夕暮にふさはしい情緒をあらはしてゐる。家々の灯は涙ぐんでゐるやうにぼんやりと瞬いて居る。

暫くの間、夕暮をぢつと見て居たが、ふと眼をあたりに轉ずると、うす暗い景色が眞赤に見えた。それはほんの一瞬間であつたけれども、瞳が痛い。痛い瞳を足許に落すと、白い小さな野菊が、淋しい冷い色をして夕闇の中に仄めいてゐた。二聲三聲、蟲が鳴き出した。冷い風が一陣さつと吹いて來る。思はず首を縮める。枯葉がからく〳〵と音を立てゝ地上に落ちた。

夕暮のとばりは次第に下りて、長き夜の世界にうつり變つて行くのだつた。

七　說明と議論

要旨

說明文の事とする說明は公平冷靜に實狀を解說する任務を持ち、議論文の事とする議論は理解力に訴へるだけでなく、更に進んでその主張に從はせる任務を持つて居ます。

說明文の最も簡單なものは單語の定義であるが、辭書等にあるものは殆ど大部分が不完全な說明である。然らば說明は如何なる點に注意したらいゝか、平易明晰にし省略を避ける事は其の主眼であります。說明文は色々實用に用ひられるが、又說明だけで議論の代用をする事もあり、說明から議論に移る事もあります。議論文は理論の文だから、理論がしつかり透徹して居ねばならぬし、又人を說得する爲には時に氣概を、時に抒情を必要とします。議論を行ふには證據を擧げて證明するの要があり、證明には論理上の演釋法、歸納法等を應用せねばなりません。而して斷案を下すだけでなく、多くその斷案に人を從はせ實行させようとする勸誘性を持たしめねばならぬものであります。

參考

○ドクトル、フエルプの言葉。

曖昧なる說明とは撞着矛盾の語なり。（佐々氏「修辭法」）

○論文に秩序ある配置は最も必要である。此處にジョン・クインシイ・アダムスの語を引かう。

一の問題に就いて數多の良き思想を有するもの幾百人ありとも、これを最も有益なる秩序を以て運

用し得るものは、唯一人のみなるべし。演說に於ける秩序ある配置は、軍事に於ける兵法又は兵士の訓練に比すべし。戰の勝利は殆ど常に、兵法と訓練との優れたるものに歸するが如く、大なる雄辯は、常に秩序の巧なるに因す。如何なる科學に於ても、其の講義の完全なりと稱らるゝ所以は多く其の秩序の完全なるに因せり。（同前）

○大町桂月の「作文五十講」の議論文の條で說く一節を次に。

諄々として理を說くことが、議論文本來の性質なるは、言ふまでも無し。されど、餘り抽象に過ぎては、やゝもすれば解し難くなり、讀者をして厭かしむべし。出來得る限り、具體的にするが肝要なり。譬をとりてわかり易くせむと力むべし。その譬も氣が利きたるものならざるべからず。氣の利きたる譬をとらば、抽象的理論が一層明白になりて、人の頭にしみ込むべし。時には、例をひくことを忘るべからず。きちんとあてはまりたる例をひかば、論旨が一層有力となるべし。又古人の言を引用するも、文を有力ならしむる一の方法なり。その古人も世の尊敬せるものなるを要す。初學の士、やゝもすれば、古言を引用する事多きに過ぎて、博學を衒はむとするものあれど、これ引用の眞意をあやまれるものなり。

他と論を交ふるは、兵を交ふるが如し。唯一圖に己れの思ふ所を述ぶるのみにて、斯く言はゞ、斯う云ふ疑が起らむ、斯う云ふ不服もあらむなど、更に顧慮せざるは、なほうかゝ進みて、伏兵に遇ふが如し。わが本陣を進むる中にも「人或は曰はむ」など、左右に搜索兵を出さゞるべからず。又他の人格や、趣味や、議論のもとづく所やを深く考察せずして、妄りに我が主張を通さむとするは、なほ敵兵の多寡其の他の情を知らずして、輕々しく兵を進むるが如し。思ひやりもあり、察しもよくして、戰ふ前に、十分に敵情を偵察せざるべからず。とかく、思慮淺きものは、學理にのみ拘泥し、己の主張を通さむとするに急にして、伏兵に遇ふこと多く、敵情偵察が不足なる故に、もろく失敗すること多きものなり。趣味なきものは、一を知りて、二を知らず。勢するどきが如きも、一騎打の勇士たるに過ぎず。思慮周密ならずば、大軍に將たる能はざるなり。

○說明文の一例として東京日日新聞（昭和三年九月十八日朝刊）掲載の一文を擧げてみよう。新聞の報道記事は急速の際執筆される爲か、殆ど如何はしい文章許りである。次の文の如き、初から終まで句切れのないのには一寸驚く。併し一體に報導記事にはかういふ種のものが多い樣である。新聞記者たる者、今少しく文章その者に就いて工夫を施して貰ひたいものである。

ラー・ネット博士

船上の感激

多年の功績に畏き邊より御沙汰

明治三十八年に來朝し新島氏を助けて同志社創設に盡力し、今日まで多年間大學にあつたラーネット博士(八一)は、夫人の病氣保養のため、住みなれた京都をあとに、十六日神戸出帆のプレシデント・マツキンレー號で歸米する旨天聽に達し、博士の功勞を思召され、俄に瑞寶章勳三等御下賜の御沙汰があり、同志社大學西村理事は、十八日午前博士代理として賞勳局に出頭勳章を拜受し、折よく同日午後五時神戸から横濱入港の同船に赴き、博士にその旨を傳へ、池田神奈川縣知事立會で船内社交室に傳達式を行つた。

○議論文の模範文例を一篇擧げて置かう。

現代學生の氣風を論ず

近事、新聞雜誌に現はれたる所によつて、今の學生社會の氣風を察するに、その最も著しき現象の一は慷慨を喜ぶ事也。吾人深く之れを憂とす。

彼等口を開けば輒ち言ふ。人は墮落せり、世は腐敗せり、名教地に墮ち、彝倫蕩然たり、一大革新なかるべからずと。言や壯ならざるに非ず。吾人憾らくは學生諸子と共に現世の腐敗を承認せむ。唯、學生諸子にして之を言ふ、果して可ならむ乎。吾人は慷慨そのものを惡しと謂はず。心の淸きものは、僞善を惡まざるを得ず。人の正しきを好むものは、不義を憤らざるを得ず。慷慨義憤は人情の最も麗しき發動と動として、吾人是を學生諸子に見たるを喜ぶ。唯々其の位に居らざれば其の事を言はず。吾人は學生の本領、他に在りて此に在らざるを告げむと欲す。

學生時代は修養の時代なり。學識を蓄へ、閱歷を積み、品位を養ふ時代なり。彼等は道德上に於ても法律上に於ても、一個人たるの責任を有せざる也。一個人の責任を有せざるは、卽ち天の假貸せる修養の時代なれば也。彼は實務の人にあらず。社會の人にあらず、所謂部屋住の人也。他日、實務の人、社會の人としての完全なる資格を得むが爲の準備時代也。靑春幾時ぞ、彼れは是の準備の爲に當に日も尙足らざるべし。何の遑ありてか慷慨者流の空言に私淑して、其の本領を顧みざらむとはする。社會は學生の慷慨によつて、毫も益を受くるものに非ず。學生自らは却て是れが爲に大損害を被らむ。かへすがへすも心得違ひと謂はざるべからず。

快濶、進取、樂天は、靑年の生命なり。完全なる人生の開發は、此の生命ありて初めて望み得べけむ。不健全なる慷慨は動もすれば人を憂鬱にし、退嬰にし、厭世にす。是の如きは學生にありては卽ち精神的に死せる也。吾人最も是を恐る。(高山樗牛)

八儀式文(祝賀文)

要旨

儀式文中の祝賀文に就いてのみ、此の課では述べました。併しながら次課の弔祭文と、儀式文としての共通な形式の心得を要する點は多々あります。さういふ點はなるべく聯絡を取つて理解させる樣致したいものです。

先づ祝賀文の五種類をあげて之が說明をなし、次で儀式文の精神及び形式に就いて述べて後、祝賀文作法の注意に及んでゆきました。祝賀文としては時と場合とに應じて似つかはしい祝賀の意の表明されたもので、禮と情とを兼ね備へ、調子修辭の朗讀に適したものだといふ事が大事な事であります。

來るべき卒業式には早速、代表者が答辭を朗讀せねばならぬのでありますから、此の際一般にその作法を指導して、實地に作らせて置くのは時宜を得た事かと存じます。

參考

○感謝狀の文例

青年學習會の功勞者への感謝狀

社會に於ける不運者は、幾らもありますけれども、年少氣鋭にして、燃ゆるが如き青雲の希望を抱きながら、家計の累ひの爲に、思ふまゝの學業を修めることの出來ないものほど、同情に値する者はなからうと思ひます。階級とか、門閥とか、因緣とかによつて、世に出で、身を立てた時代は、遠くの過去となつてしまつて、今や自由競爭の時代となり、實力次第で、どんなにも榮進成功することが出來る世の中となりました。併しながら、人生の競爭裏に立ちて、優勝の月桂冠を得ようとするには、どうしても、その根元要素となる所の學業を修め、十分なる實力を涵養するといふことが必要であります。然るに、彼等憐むべき青少年は、境遇上の差支の爲、折角開かれてゐる榮進の門をくゞることが出來ないのであります。

某先生は、社會に於けるこの缺陷をひどく遺憾とし、周旋奔走して資金を調達し、青年學習會を設立して公務の餘暇を割き、殆ど寢食を忘れて、本會經營の衝に當り、該博なる學識と、燃ゆるが如き熱誠とを以て可憐なる青少年子弟を啓發誘導し、切磋修練の功を積みて社會の活舞臺に立たせられてゐますが、創設以來、既に十年の歲月を經、本會を經由して世に出たものは百を以て數ふるほどもあり、中に

は高等文官試驗に及第して榮職にあるもの、實業界で相當な成績を收めてゐるもの、學界に名を揚げてゐるものなどあつて、本會の成績は非常に優越でありますが、これは偏に先生の御功勞によつて生み出された賜物であります。今や、本會の基礎も、いよ〳〵安定し、會運は日を追うて盛況に赴いて居り、將來の隆昌も期して待つべきで、誠に欣慶に堪へません。玆に、本會の關係者相會し、本會第十回の創立記念日を迎へて、聊か祝意を表するに當り、先生の恩勞功績に對して、深く感謝の意を表する次第であります。

（高木武「中等作文教本」）

九　儀式文（弔祭文）

要旨

弔祭文の三種を擧げて之が說明をなし、其の各〻の作法に就いて注意を述べました。

弔辭は葬式の式場で讀むものですから、十分文章も練つて置かねばなりませんが、又目上の人に對する文であるが爲に情の籠らぬ樣では困ります。場合が場合故、情が籠つて居るものは參列者をして泣かせるに足るでせう。

祭文はいくらか時を經て書くものですから、弔辭よりゆとりある氣で、謹嚴に書き、故人を賞讃追慕したいものです。

哀辭は自分だけの文章ですから、弔祭の意を示さずとも衷情を披瀝して書けばいゝのです。

參考

○弔辭の文例

1. 戰死せし親友を祭る文

嗚呼君、忠慨の志、義勇の膽を以て、驟然軍に從ひ、身を忘れて公に奉じ、奮然敢往、遂に命を致せり。天下聞く者誰か感激して英風を思はざらむ。況んや余の君に於ける、尋常師友を以て相識視す可からざるをや。嗚呼忠に志して忠に死し、義に志して義に終り、興亞の業に志して征清の役に殉ぜしは、所謂馬革に屍を裹むもの、君の志に於て則ち負く處なし。然りと雖も、東方の事、任重くして道遠し。余の君に期する處、豈唯此の如きのみならんや。而して天邊に我が有望の士を奪ふ。その余の心に於ける如

何ぞや。余は大いに同志の士を會し、一大祭事を擧げ、以て聊か忠魂毅魄を慰めんと欲す。獨り憾しむ。諸同志遠征未だ還らず、且諸氏の消息未だ詳ならざる處あり。因つて暫く待つあり。今や厚暦改瑞海内齊しく我が皇の威德を仰ぎ、我が軍の連勝を頌す。余君を懷うて見るべからず、乃ち年饈香果の供を敬具して、以て君の魂を招く。嗚呼嚶水の東、東山の麓は、是れ余が君と春を迎へし處、山靜に谷幽に、門に例客なく、室に圖書あり。庶幾は君の靈、優游棲止、以て靜に三軍の振旅と、諸同志が凱歌を奏して至るとを待て。（荒尾精）

2. 嵐蘭誄

金革を褥にして、敢て弛まざるは士の志なり、文質偏ならざるを君子の功とす。松倉嵐蘭は義を骨にして、實を腸にし、老莊の魂にかけて、風雅を肺肝の間に遊ばしむ。予とちなむ事十年餘り九年にや、此の三年ばかり、官を辭して岩洞に先賢の跡を慕ふと雖も、老母を荷ひ、稚子をほだとして、未だ世波に漂ふ。されども、榮辱の間に居らず、日々風雲に坐して、今年仲の秋、中の三日、由井金澤の波の枕に月を添ふとて、鎌倉に杖を曳き、其の歸途より心地惱ましうして、終に息絶えぬ。同じき二十七日の夜の事にや、七十年の母に先立ち、七歳の稚子に思ひを殘す。未だ惜しむべき齡の五十年にだに足らず。公の爲には腹押切つても悔むまじき器物の、はかなき秋風に吹しほれたる草の秧、いかに露けくも口惜くもあるべき。今はの時の心さへ知られて悲しきに、老母の恨み、同胞の嘆き、親しき限りは聞傳へて、偏に親族の別に等し。過ぎつる睦月ばかりに、稚子が手を取りて、予が草庵に來り、彼に號得さすべき由を乞ふ。壬戌五歳の眼ざし美しと、戌の一字を取りて、嵐戌と名づく、其の嬉べる色、今目のあたりを去らず。生くる時、睦しからぬをだに、亡くてぞ人はと偲ばる、習ひ、まして父の如く、子の如く、手の如く、足の如く、年比いひ慣れむつびたる佛の、愁の秧に結ぼれて枕も浮きぬべきばかりなり。筆を執りて思ひを述べんとすれば、才拙なく、言はむとすれば胸ふたがりて、唯、脇息にかゝりて、夕の雲に向ふのみ。

秋風に折れてかなしき桑の杖。（松尾芭蕉）

一〇　通信文

要旨

通信文の日用缺くべからざるものである事を述べて冒頭と致しました。

次に手紙に就いて要を得ること、敬意を失はないこと、親愛の情を表はすこと等内容上の注意を記し、尙手紙文排列の順序を説明し、用式と書式とに就いて心得ねばならぬ

事共を實際的に申述べて置きました。

端書繪端書及び電報等に就いてもなるべく實際的な注意をあげました。

通信文は理論より實際でありますから、出來るだけ實際に適合した條件で作文の練習をさせて戴きたいと思ひます。

參考

○ローマのケーザルが西紀前四七年に小亞細亞のポントス王を征し五日にしてゼラを占領した時、其の戰捷をローマに報告した文は極めて簡潔で有名である。卽ちそれは「來り、見、勝てり。」(veni, vidi, vici.) といふのである。

○電報の條に於て說明しなかつた留置、局待、親展等に就いても一應の說明が必要であらう。尙特別指定の電報に配達日時指定電報があるが、これはある特別指定の日時に於て配達するもので、地方なら三十六時間以內、市內なら二十四時間以內に打電せねばならぬ。多く選擧の際等に依賴電報として利用されるものである。

○幸田露伴氏「尺牘說」の一節を揭げて參考に供しよう。

「書簡は意を達するのみにして足る。而も意を達するのみにして足らざる有り。譬へば花のたゞ美すなはち足るが如し、而もたゞ美すなはち足らざる有り。若し夫れ芬烈の香あり、馥郁の香あり、微妙殊勝の香あれば、人愈〻これを悅ぶ。美にして香有るに比すれば、美にして香無きはもとより足らざる有る也。たゞ美すなはち足る、而もたゞ美卽ち足らざるありといふもの、是これを道ふ也。書簡はもと意を達せんと欲するに出づ。意を達するを能くす、卽ち足るのみ。而も能く意を達す、猶足らざるあらんとす。予古の佳章を見るに、名花の多く奇香あるが如きを覺ゆ。書簡も文の一體なるのみ。文豈意を達するのみにして而して足らんや。文の能くし難き久し。書簡の能くし難きも亦久しい哉。」

「尺牘は能く盡すを以て佳となし、至つて簡なるを以て巧となし、趣あるを以て妙となす。能く盡して、而して至つて簡、而して趣有る、此を最上乘と爲す。語多くして意を盡さず、辭繁にして簡なるを得ず、文飾つて趣を成す無き、此を三短となす。三短有つて一長無き、これを最惡となす。予の如きは殊に不惡の文、猶之を爲すを得ず。尺牘の文を談ずる能はざるや久矣。」

大町桂月がその著「作文五十講」中說く所の書簡文心得の一節を引いてみよう。

「物も言ひやうにて角が立つとやら、殊に書簡文に在りては、最も圓滑ならざるべからざることと存じ候。折角、手紙にて依賴して、先方が同情をよする事にても、言ひ方が角だちては、爲に感情

をわるくして、事が成就せぬ樣に成り申候。書簡文と他の普通文とを比較するに、書簡文の體が、餘程、圓滑に候。これ書簡文必然の結果なるが、それもへたに書いては、さつぱり圓滑にならず候間よく〳〵この點注意せらるべし。」

「書簡は、禮儀を失はず、感情を害せざるにはじまりて、人を動かすに終り申候。公用の書簡は、直截明晰、正確にして威嚴あるを要するものなれば、多少、乾燥無味になるべく候へども、普通一般の書簡は、人を動かす分子の多きがよろしく候。氣取つたり、四角張つたり、儀式的に陷つたりしては、意はつくしても、情はつくさず、讀んでも、面白からず。文句は拙な處ありても、眞情が流露して居れば、書簡として上乘に候。親子、兄弟、親友、夫婦などが、相隔り居る場合に、眞情の流露せる手紙に接すれば、まのあたり、その人に遇ふが如き心地して、うれしさ、この上もなきものに候。眞情の流露を圖らむには、文字に拘束せられず、書式に拘泥せず、思ふ所、感ずる所を、ありのまゝに書かざるべからず。薄紙一つへだてたるが如き書き方にては、眞情流露せず、人も動かぬものに候。その邊は、名人の書簡を熟讀して、悟入なさるべく候。」

○書簡文例

缺席がちなる友人の許に

久しく御出席なきは、御病氣のためとのみ、思ひ居りしに、聞くところによれば、つまらぬ閑遊に、其の日を送らせられ候趣、如何なる御考かは存ぜず候へども、平素思慮深き兄にも似合しからざることと存じ候。今更申すまでもなき事ながら、青年は人生の春に候へば、この折に、其の培養を怠らむには、美しき果實を收めむことは、到底覺束なきことに候。然るに、身を學籍につらね居る兄が、盛に培養すべき春を他所にして、いはゞ、人生の冬に、爐邊の閑遊とも云ふべき、圍碁などに耽けらるゝは策の得たるものには候まじ。この邊篤と御考への上、學校へも御出でなされ、餘暇を以て閑遊を試みたまひては如何に。行きて歸らぬは光陰、先に立たぬは後悔など申せば、思ひ違ひなきやう、偏に祈上候。一片の友情もだし難くて、申進じ候ことなれば、失禮の字句は、幾重にも御見ゆるし下され度候。

（橋詰孝一郎）

作文新編備考 卷五終

作文新編備考ノ五

昭和三年十二月十五日印刷
昭和三年十二月十八日發行

非賣品

著作權所有

編者　東京市神田區通神保町六番地　光風館編輯所
發行兼印刷者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店
（電話神田三〇八七番　振替口座東京三二七七番）

東京高等師範學校教授　青田彌平編

大正十五年二月十日文部省檢定濟
昭和三年九月二十八日文部省檢定出願
大正十五年五月二十五日文部省檢定濟

中學　國文教科書　洋裝全十冊
國文讀本　洋裝全十冊
現代文新鈔　洋裝全五冊

（日清印刷株式會社印刷）

320
219

K